

## 【21世紀教養プロジェクト・書評】

### エーリッヒ・フロム 著 鈴木 晶 訳 『愛すること』

#### 愛とは何か

本書を読むことに決めた理由は、まず題名に惹かれた。子供の頃、私は「愛」と「恋」は同じだと思っていた。しかし、成長するにつれて、その考えが少しずつ変わってきた。ただ、何が違うのかと言われると、はっきりした違いがわからない。題名を見た瞬間、そういう矛盾を解消してくれるのではないかと思い、本書を読むことにした。

私は新書を読むのが苦手だが、本書自体はそれほど厚みが薄かったり重かったりするものではなく、しかし本の中に詰まっていることは一文一文考えさせられるので、良い意味で期待を裏切られる重さがあった。親子の愛、兄弟愛、異性愛、自己愛、神への愛など、色んな対象への愛を検証しながら、それらが本質的にどのようなもので、私たち今までそれについてどのような誤認をしがちであるか、を具体的な例を挙げて、「愛することとは一体どういうことなのか」が論理的に説かれている。

愛は技術である。このことが本書の命題であり、根幹になっている。愛は心の中にあるだけではほとんど幸せを生まず、相手にも伝わらない。愛の行為が必要なのだ。しかし、愛を伝える方法を知らなければ、もしくは間違えた方法で伝えていたのなら、それは「愛していない」と他人の目から見れば同じである。「技術だとしたら、知識と努力が必要だ」という著者は主張しているが、これは知識を得て、努力をすれば上達できるということである。その技術を活かせるようになれば、幸せになれるということではないだろうか。自分自身の経験を振り返って照らし合わせてみて、「あの時はちゃんと伝えきれていなかった」と反省させられる点もあれば、本書の中で指摘されているような自己中心な愛で苦しみを繰り返している人々や、その本質的な問題に気付かず、ただその人を慰めることしかできなかった無知な自分を思い出したり、私たちが「これが普通だ」と思って改めて考えもしない、陥りがちな「偽りの愛」の形について、本書は教えてくれた。

「愛は自分自身の愛する能力にもとづいて、愛する人の成長と幸福を積極的に求めることである。」これが「愛」を実践する際の基本のような気がする。愛の行為は自分の能力でやるしかない。能力がなければできない。でも、誰にでもそれなりの愛の能力があるのだと思う。だからこそ、人それぞれに愛し方が違うのは当たり前ののだ。自分らしい愛の実践ができればいいのだと思う。また、能力は努力を続ければ向上させることができる。愛する人、幸せにしたい人の「幸せ」を求めることが、「愛の基本」だと思う。

愛する人の人間性の向上、つまり幸せになる能力の向上を求めることが、いちばんの相手を幸せにする方法ではないかと考える。成長できれば、相手は自分がいなくても幸せになれるのだ。相手の成長を考えられるのは深い愛がある証拠ではないだろうか。愛することは積極的に行えることなのだ。だから、自分が幸せになる方法でもあるのだ。もう一つ、基本を付け加えさせてもらおうとしたら、「愛の実践によって自分が幸せになれることが大事」なのだろうか。著者は、「愛について学ぶべきことは何もない、という思いこみを生む第三の誤りは、恋に「落ちる」という最初の体験と、愛している、あるいはもっとうまく表現すれば、愛の中に「とどまっている」という持続的な状態とを、混同していることである。」と主張している。例外はあるものの、私は恋はいつか冷めてしまうものであり、愛は育てることができ、長く続けられるものだと思う。自ら幸せになるためには、「愛する」ほうがいいと思う。

本書では、私の将来の夢に直結する「教育」についても述べている。著者は本書の中で、「教育とは、子供がその可能性を実現してゆくのを助けることである。教育の反対が洗脳であり、これは可能性の成長に対する信念の欠如と大人が正しいと思うことを子供に吹き込み、正しくないと思われることを根絶すれば、子供は正しく成長するだろうという思いこみに基づいている。」と定義している。教育 education の語源はラテン語の *e-ducere* であり、これは「前へ導く」、「潜在的にあるものを外へ引き出す」という意味である。もしかすると、教育は、子どもの可能性を信じ、実現を助けると同時に、教師、親を含む大人も共に学ぶという姿勢が必要なのかもしれない。

愛するという姿勢は、見た目にも派手派手しいパフォーマンスや言葉ではなく、信念である、というところは、自分がそれを実践できるのか／出来ているのかどうか、ということを全く抜きにして、非常に共感出来る部分である。愛されている自信が無いと、言葉や具体的な行動を求めてしまうのだが、愛されることを求める以前に、自分がそもそも信念を持っていなければ、その関係性はとてももろく軟弱で、少しの不安や「本当はどう思っているのだろう」

と相手を疑ってしまうことで簡単に崩れさってしまう。その信念が強固であれば、どんなにパフォーマンスや言葉がなくても、信頼を築き上げ、愛し続けることが出来るのだろう。愛というのはもちろん相手があつての話ではあるが、突き詰めると自分の信念の問題で、自分にその覚悟があるのかどうかということが重要なのだ。

吉川 香穂 (人12-379)

## 【21 世紀教養プロジェクト・書評】

ミヒヤエル・エンデ著  
『モモ』

初めてこの本を読んだのは小学生二年生の時である。その当時では理解ができなかったことがあった。それは「この物語を過去に起こったように話しましたが、将来起きることとして話してもよかったのですよ」という作者のあとがきに出てくる謎の人物の言葉である。理解できなかったと言うよりも、実感できなかったというのが正しいだろう。中学、高校と進学する中で時間というものをより意識するようになった。今回、もう一度読み直したのは私の中の時間というものが変化したのか確認するためにも再びこの本を開いた。

モモ、という不思議な少女が廃墟の遺跡に一人住みついた。その少女の見た目は奇妙な格好だが、ある才能があった。それは話を聞く能力である。苦悩している人、困っている人はモモのところに自然と集まり話を聞いてもらうのだ。そんなモモたちに事件が起こる。時間どろぼうという名の灰色の男たちが人々の時間を節約させようとする。彼らは秒単位まで人生の無駄な時間を計算し突きつけることによって人々に時間を節約させようとする。しかしモモには通じなかった。モモは時間を操るマイスターの元へと逃げる。その間に灰色の男たちはモモの友人たちを「時間節約」へと導き、モモを孤立させようとする。モモは灰色の男たちから友人達を取り戻すため、灰色の男たちに立ち向かう。

この物語は「時間」というものを中心に物語が進んでいく。筆者がなによりも伝えたかったのは灰色の男たちによって生まれた「時間節約」の社会であると考え。その社会に住む人々はみな不機嫌で怒りっぱく疲れた顔をして静けさを忘れて生活している。幸せになるために時間を節約するために「人間らしい時間」を削除することが正しいとされている。幼いころでは実感できなかったことはその社会である。しかし、今なら容易に想像できる。現代社会そのものが「時間節約」の社会だからだ。現実には灰色の男たちはいないにも関わらず、人々は「時間」に縛られて生活している。誰もが最初からそうだったわけでは

たわけではない、時間を忘れて遊ぶということは幼いころみんな経験したと思う。年を取るにつれて時間が早くなるのだろうか。そんなことはないはずだが、小さいころは時間があっと思い返す人が多い。つまり物語の「時間節約」の社会は現実には起こっているのである。わたしたちの周りには見えない灰色の男たちがいるのだ。時間を節約しなければならないという意識は人々の中に植え付けられてしまっている。中学生や高校生ですら「時間がない」という観念に囚われてしまっている。筆者はこの現代社会を痛烈に批判している。この本が出版されたのは1973年だが、2012年の社会でも同じことが言える。むしろよりその「時間節約」の社会に近づいたと思える。

モモはなぜほかの人のように「時間節約」をしなかったのか。それは「人間らしく生きること」というものをモモは知っていたからである。「人間らしく生きる」とはどういうことであろう。大学生となり「時間」にゆとりができた。それは「時間節約」をしていないため人間らしく生きていることになるのか。そうではないだろう。モモは誰よりも「時間」の大切さを知っている。マイスター・ホラの時間の部屋で描かれる人間ひとりひとりの「時間」は美しくとても雄大だ。筆者は「人間の時間」を知ることこそが「人間らしく生きる」ことだと伝えたかったのだと考える。モモはそれをわかっていた。

この物語のあちこちに出てくる「さかさま小路」というのは今の社会を痛烈に批判している。「さかさま小路」では急ごうとすればするほど前に進むことができないのだ。また後ろ向きに進まないと前に進めない。灰色の男たちはそのせいでモモたちに追いつくことができなかった。これはただ急ごうとする人間たちがただ速度をあげ前に行こうとするのを表現している。ファンタジーのなかにもこのように表現を行うことで批判を自然に溶け込ませている。それはしっかりと読者に伝わる。

この物語を読み自分の時間というものを考えるようになった。好きなことをし、好きなように生きることが「人間らしく生きる」のではない。時間の大切さを理解することが何よりも大切なのだとわかった。時間に縛られている社会の中では逃れることはできないのが必然である。しかし、その中でも自分

らしく生きるということを考え行動するだけでも違う。作者のあとがきについて今は理解できなかった。「時間」について再び考えることができた。

私はこの本を私と同じ世代に呼んでももらいたいと思う。これから社会に出ていくという20歳前後の若者にとって「時間」のあり方考えてもらいたいからだ。人生の時間というものがどれだけ貴重で尊いも

のかもう一度理解する必要があると考える。時間に追われて生きる現代社会の中でモモという物語は「人間らしく生きる」ということがテーマであり、それがどれだけ大切かを教えてくれる。今ではどの人も時間がないということが多くなってきてしまっている。

青砥 美紗（人12-3）